Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 の研究：意欲語幹（Desiderativ）動詞の機能に関するパーニニ文法学の理解について*

尾　園　絢　一

0. 古インドアーリヤ語の意欲活用（Desiderativ[1]）は，主語の意欲を表示することを主たる機能に持つ動詞のカテゴリーである[2]。主語の意欲は Desid. という 2 次的現在語幹の機能によって表示されるものであり，接続法（Konjunktiv），願望法（Optativ）などの法が話者の心的態度を表示するのとは次元を異にする。例えば，*jigāṁsati*「彼は行こうと欲する」（Desid.Ind.）において，主語に「行く」という意欲があることを Desid. 語幹は示し，それを話者は直説法（Ind.）によって報告・叙述している。

パーニニ（紀元前 4 世紀）は約 30 の規則において Desid. を形成する接辞 *sa*^{N} の下に形成法，機能について規定している。*sa*^{N} の導入条件は Pāṇ. III 1,5–7 に定められており，その中，*sa*^{N} が欲求を表示する場合に導入されることを定める Pāṇ. III 1,7 は Desid. の機能を教える唯一の規則である。パーニニに後続する，カーティアーヤナの Vārttika（紀元前 3 世紀），パタンジャリの Bhāṣya（紀元前 2 世紀）は同規則の個々の文言の必要性を詳細に検討しながら，*sa*^{N} がどういう場合に使用され，どのような意味を表現するのかということを明確にしようとした。そして Pāṇ. III 1,7 について『マハーバーシャ』が伝える議論とそれに対する後代の注釈が事実上，Desid. の機能に関するパーニニ文法学の理解となる。

そこで，本研究は Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 とカイヤタ註（Pradīpa）とを読み解き，Desid. の機能がパーニニ文法学においてどのように理解されていたかを明らかにするこ

* 本稿は 2013 年 9 月 5-6 日広島大学で開かれたマハーバーシャ研究会にて得られた成果を基にしている。同研究会では，小川英世先生より『マハーバーシャ』の解釈について多くのご教示をいただいた。また研究会参加者李宰炯，石村克，川村悠人，斉藤茜，友成有紀の諸氏からも多くのご指摘をいただいた。心より御礼申し上げます。

1 本稿では文法用語の表記にドイツ語を用いる。

2 ヴェーダ語における Desiderativ についての最新の研究に，Heenen（2006）がある。

とを目指す。本稿では，先ず，Desid. 機能に関連するパーニニの規則の問題を概観した後，Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 最初の論題，*dhātoḥ*「動詞語基の後に」という文言の必要性に関する部分を検討する。尚，Bhāṣya については，KIELHORN / ABHYANKAR（1962-1972）を，カイヤタ註およびナーゲーシャ註（Uddyota）については，Nirṇayasāgar 本（ŚIVDATTA / RAGHUNĀTHA 1937）を底本とした。

1.1. 意欲語幹を形成する接辞 sa^{N} は Pāṇ. III 1,5-7 に定められる条件の下，導入される：

Pāṇ. III 1,5 *gup-tij-kidbhyaḥ san*［*dhātoḥ* 91, *paraś ca* 2, *pratyayaḥ*1］

gup^{A}（DhP I 1019），tij^{A}（DhP I 1020），$kit^{Á}$（DhP I 1042）という動詞語基の後ろに接辞 sa^{N} が用いられる。

Pāṇ. III 1,6 *mān-badha-dān-śānbhyo dīrghaś cābyāsasya*［*dhātoḥ* 91, *san* 5, *paraś ca* 2, *pratyayaḥ*1］

mān（DhP I 1021），$badh^{A}$,（DhP I 1022），*dān*（DhP I 1043），*śān*（DhP I 1044）という動詞語基の後ろに接辞 sa^{N} が用いられる，そして重複音節［の母音］の代わりに長母音が用いられる。

ここに挙げられる動詞語基は，sa^{N} が必然的に（つまり欲求を表示しなくても）導入され，Desid. 語幹を作る。これらの動詞語基は sa^{N} を導入するために特別に立てられたものと判断される。この規則に従えば，*jugupsate*, *titikṣate*, *ciktsati*, *mīmāṁsate*, *bībhatsate*, *dīdāṁsate*, *śīāṁsate* が想定される。これらの中，最初の 5 つの語幹はヴェーダに用例が見出される：*jugupsa-*^{te}「嫌悪する，避ける」，*titikṣa-*^{te}（< √*tyaj*「捨てる，離れる」）「忍ぶ，耐える」（RV 以降），*cikitsa-*$^{ti/te}$「検証・診断する」（RV 以降），*mīmāṁsa-*^{te}「検討する」（AV 以降），*bībhatsa-*^{te}（< √*bādh*「押しのける」）「嫌悪する」。これらのほとんどは既にヴェーダの時代に語彙化して独立の意味を持つに至ったものと判断される。*dīdāṃsate*, *śīśāṃsate* は用例が見出せず，これらの動詞の意味も不明である。

次の規則 Pāṇ. III 1,7 は，Desid.-Suffix sa^{N} が *icchā-*「欲求」を示すことを教える。そして sa^{N} は，欲求の主体とその対象となる行為の主体が同じ場合に導入される：

Pāṇ. III 1,7［*san* 5, *paraḥ* 2, *pratyayaḥ* 1］

dhātoḥ karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyāṃ vā

動詞語基（*dhātu-*）［が示す行為］が［欲求の］対象であり，［欲求行為と］同じ

行為主体を持つ場合，その後に，接辞 *sa*^{N} が欲求の意味で任意に用いられる。

sa^{N} が示す意味は欲求（*icchā-*）を表す動詞語基（V_1）と欲求の対象（*karman-*）となる行為を示す動詞語基（V_2）の 2 つの意味からなると分析される。その際，V_1 の行為者と V_2 のそれは同じ（*samānakartṛka-*）でなければならない。

ここで問題となるのは規則中に言われる *vā* である。パーニニ文法学の理解によれば，Desid. 語形（*jugupsate*, *mīmāṁsate* 等の語彙化したものを除く）は，Inf. *-tum* + *icchati* のような分析表現に置き換えることが可能である。同様に，例えば，*putrīyati*「息子を欲する」のような，Denom.（Pāṇ. III 1,8ff.）の場合は，*putram icchati* という分析表現に置き換えられ，欲求の対象（*karman-*）である *putram* の後に $^{K}ya^{C}$ 等が導入される[3]。先行規則 Pāṇ. III 1,5-6 において *gup*, *tij*, *man* 等の動詞語基には（常に）*sa*^{N} が導入されるのに対し，その他の動詞は III 1,7 の導入条件を満たしている場合は，*sa*^{N} を導入して Desid. を作ることもできれば，Desid. と同じ意味を表すのに他の表現（*tum*$_u^{N}$ + *iṣ*）を用いることもできることを教えたものと解釈される。

1.2. パーニニ文法学の理解によると，欲求を表す表現には，Desid.（*sa*^{N}）による統合表現（*vṛtti-*）と Inf.（*tum*$_u^{N}$）+ *iṣ*「～することを欲する」による分析表現（*vākya-*）がある。Inf.（*tum*$_u^{N}$）+ *iṣ* という表現は Pāṇ. III 3,158 によって教えられる。同規則によれば，*iṣ* などの欲求の意味を表示する動詞が Inf. と共に統語的まとまり（Syntagma）を構成し（*upapade*），欲求行為の主体とその対象となる行為の主体が同じ場合に，Inf. の接辞 *tum*$_u^{N}$ が導入される：

Pāṇ. III 3,158 *samānakartṛkeṣu tumun*［*icchārtheṣu* 157, *dhātau* 155, *upapadam* 1,92, *dhātoḥ* 1,91, *paraś* 2, *pratyayaḥ* 1］

「欲求の意味を表示する動詞語基（V_1）が upapada[4] であり，［動詞語基（V_2）と］同じ行為者を持つ時，動詞語基（V_2）の後に *tum*$_u^{N}$ が生じる」

---

[3] Pāṇ. III 1,8 *supa ātmanaḥ kyac* [*karmaṇaḥ*, *icchāyām* 7, *vā* 5, *paraḥ* 2, *pratyayaḥ* 1]「［欲求行為の］対象［を示す］名詞（*s*^{UP} で終わる語）の後に，自分に対する欲求の意味で任意に $^{K}ya^{C}$ が用いられる」

[4] Pāṇ. III 1,92 *tatropapade saptamīstham*「この課において，第 7 格（Lok.）語尾で終わる語［によって指示される語］は upapada と呼ばれる」。upapada の定義については小川（1992 : 44, fn. 57f.）。

先行規則 Pāṇ. III 3,157 によれば，欲求を意味する動詞 *iṣ* 等と Opt. 又は Iptv. 形の動詞とが結びつくことによって，例えば *icchāmi bhuñjīta*「私は欲する：彼は食べてほしい」[5] のように欲求の主体と対象となる行為の主体が異なる文が用いられる。これに対し Pāṇ. III 3,158 は，*bhoktum icchāmi*「私は食べることを欲する」において，Inf. の行為者は必ず主動詞のそれと一致するということを *samānakartṛka-* という文言によって教えている [6]。主語の欲求を表す Desid. もまた，欲求の主体と行為の主体が同じ（*samānakartṛka-*）であるから，Inf. + *icchati* と同じ意味を表すことになり，両者の交換可能性が保証される。但し，パーニニが実際の言語使用のレベルにおいて，Desid. が *-tum* + *iṣ* と交換可能と考えていたかは判断できない。ヴェーダ語では，欲求を表す動詞が Inf. をとる例はさほど多くなく，また *-tum* + *iṣ* のヴェーダの用例は知られていない。*-tum* + *iṣ* は恐らくヴェーダ語よりもさらに新しい時代層に属するものと考えられる。パーニニの時代には分析言語化が進み，*-tum* + *icchati* のような表現が Desid. に代わるものとして発達していた可能性が考えられる。

但し，Deshpande（1980：86f.）が指摘するように，理論的に考えるならば，Desid. と Inf. + *iṣ* の意味領域は完全に重なるわけではない。Pāṇ. III 1,7 によれば，sa^{N} が導入される動詞語基［が示す行為］が欲求行為の対象（*karman-*）となることを sa^{N} の導入条件とする。それに対して，Pāṇ. III 3,158 は，tum_{u}^{N} が欲求行為を表す，幾つかの動詞と共に用いられることを tum_{u}^{N} の導入条件としながらも，Inf.（*tumunanta-*）が欲求行為を示す動詞の目的語（*karman-*）となることは条件となっていない。例えば，*devadatto grāmaṃ gantum icchati* という文において，*grāmam* が *icchati* の目的語となる場合と *gantum* の目的語となる場合の二つの解釈が理論上成り立つ。だが *jigāṃsati* と同じ意味を表すためには当然 *gantum* が *icchati* の目的語でなければならない。Vārt. 9 によれば，Desid. という統合表現と Inf. + *iṣ* という分析表現は任意に交換可能な関係には立たず，

---

[5] Pāṇ. III 3,157 *icchārtheṣu liṅ-loṭau*［*dhātau* 155, *upapadam* 1,92, *dhātoḥ* 1,91, *paraś* 2, *pratyayaḥ* 1］「欲求の意味を持つ動詞語基が upapada である時は，動詞語基の後ろに $l^{\text{Ṅ}}$（Opt.）と l^{OT}（Iptv.）が生じる」

[6] Deshpande（1980：33f.）は，別の規則 Pāṇ. III 3,10 と Pāṇ. III 4,65 に規定される Inf. も主動詞と行為者が共通であること（*samānakartṛka-*）を条件とするかどうかという問題を指摘する。Deshpande が述べているように，*samānakartṛka-* という条件がないと考える場合でも，主動詞の行為者と主動詞の補足成分である Inf. の行為者が異なるような構文（*accusativus cum infinitivo*）を意図しているということにはならない。このような構文の確実な例は知られておらず，パーニニもそうした構文をそもそも想定していなかったので，条件を設けなかったものと考えるのが妥当である。

Pāṇ. III 1,7 は常に sa^{N} が導入されることを教えたものである[7]。Vārt. 10 ad Pāṇ. III 1,7 は，tum_{u}^{N} の後に任意に sa^{N} が導入され，それから，tum_{u}^{N} に lu^{K} が代置すると教える[8]。これによれば，任意に交換可能な関係にあるのは，tum_{u}^{N} + *iṣ* と Dhātu + sa^{N} ではなく，tum_{u}^{N} + *iṣ* と tum_{u}^{N}（> ∅）+ sa^{N} という二つの分析表現ということになる。つまり *gantum icchati* のように，*iṣ*「欲する」などの動詞と Inf. とが結びつく場合には（*upapade*），*iṣ* などの動詞が表す欲求の意味を sa^{N} が担うことができる。

2. Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7（vol. II, p. 12 – 15）

2.0. Synopsis

i. *dhātoḥ*「動詞語基の後に」の目的 : p. 12 – 13, line 7

・動詞前接辞を伴う語への適用禁止

・名詞への適用禁止

・行為名詞（-*ana*-）語幹，Inf. への適用禁止

ii. *karmaṇaḥ samānakartṛkād*「行為の対象となり，［欲求行為と］同じ行為主体の［動詞語基の］後に」の目的 : p. 13, line 8 – p. 14, line 2.

・語幹確定のために *karmaṇaḥ* か *dhātoḥ* の文言が必要 ; *dhatoḥ* の文言を優先する

・動詞前接辞を伴う語が行為の対象（*karman*-）である

・行為の対象ではないもの（動詞前接辞）を含む動詞語基は行為の対象にならないという反論

・全体と部分を表す Gen.（*avayavaṣaṣṭhī*-）に準ずる関係にもとづく Gen.

---

[7] カイヤタの説明によれば，統合表現はひとまとまりの意味を表示する（*ekārthībhāva*-）のに対し，分析表現は二つの異なる語の意味が互いに結びつくことを期待する（*vyapekṣā*-）ので両者は意味的に等しい関係にはない。Cf. Wezler（1975 : 34ff.）.

[8] Cf. Deshpande（1980 : 88f.）. 但し，tum_{u}^{N} は *iṣ* などの欲求を表す動詞と共に用いられることが導入条件となるので, *iṣ* などを排除して tum_{u}^{N} の後に sa^{N} が導入されないことが Bhāṣya で述べられている（→訳 § 14）。ナーゲーシャは次のように説明する : Uddyota（Śivdatta / Raghunātha 1937 : 28）: *atrāpi samarthaparibhāṣā upatiṣṭhate ity arthe vārrtikasaṃmatiṃ darśayaṃs tām udāharati…ata eva copapadābhāve 'pi tumun vṛttiviṣaye iti bodhyam*「これについても，［スートラと］同じ効力を持つ通則（*paribhāṣā*）が［根底に］ある，と［教える］目的で，Vārt. の見解を提示しながら，それを例証している … そしてまさにこれ故，upapada が生じない場合でも，tum_{u}^{N} は統合表現の領域において［導入される］と理解されるべきである」。

dhātoḥ の正当化

iii.　*vā*「任意に」の目的：p. 14, line 3 − p. 15, line 4.

・統合表現と分析表現の任意性の否定

・$tum_u{}^N$+ *iṣ* と $tum_u{}^N$ + sa^N との任意性

・一人称における Opt. との任意性

・*icchā-*「欲求」と *āśaṅkhā-*「懸念」の意味の任意性

iv.　動詞語基 *iṣ* の確定（DhP IV 19, DhP VI 59, DhP IX 53）：p. 15, lines 5 − 7

v.　*grāmaṃ gantum icchati* における行為の対象（*karman-*）：p. 15, lines 8 − 11.

vi.　sa^N の Desid. 語幹（*sananta-*）への再適用（e.g. *jugupsate* + sa^N > *jugupsiṣate*）：p. 15, lines 12 − 23.

2.1.　*dhātoḥ* の文言の目的

2.1.1.　要旨

2.1.1.1.　動詞前接辞を伴う動詞語基への適用を禁止する目的（§1 − 6）

最初の論題では *dhātoḥ*「動詞語基の後に」という文言の必要性について議論されている。仮に Pāṇ. III 1,7 に *karmaṇaḥ*「行為の対象（*karman-*）［が示す語］の後に」だけが言及され，*dhātoḥ* の文言がなければ，行為の対象を示すものは，動詞前接辞と動詞語基の複合体（*saṃghāta-*）なのか，それとも動詞前接辞を含まない動詞語基なのかという問題が起こる。それ故 *pra-kṛ* のような動詞前接辞と動詞語基の複合体（*saṃghāta-*）において，動詞語基のみに sa^N が適用されることを示すために必要である。さもなければ，sa^N が *pra-kṛ* という複合体に適用され，その複合体の重複（*dvirvacana-*）が起こる（**prakṛ-prakṛ-*sa^N）。だが，行為の対象（*karman-*）となるのは，動詞語基が表示する行為であり，行為の限定者たる動詞前接辞は含まれないので，このような問題は起こらない。また，複合体が行為の対象を表示すると考えるならば，複合体の一部である *dhātu-* は，行為の対象の一部を構成するものにすぎないので，*dhātu-* の文言を設けたとしても *dhātu-* の後に sa^N が導入されることはない。従って，*dhātoḥ* の文言は必要ない。

2.1.1.2.　名詞への適用を禁止する目的（§7 − 12）

sa^N を複合体に適用することを禁止する目的で *dhātoḥ* と言われているのではないとすると，名詞（*subanta-*）に sa^N が起こるのを防ぐためにあるという見解が提出される。

Denominativ（$^{K}ya^{C}$ 等）の形成法を定める Pāṇ. III 1,8 以下は，直前にある Desid. の規則に対する例外規定（*apavāda-*）であるから，*dhātu-* の文言がなくても sa^{N} の導入を阻止する。従って *dhātu-* の文言の目的ではない。これに対し反論者は Denom.-Suffix（$^{K}ya^{C}$）は，Pāṇ. III 1,8 において自分に関係する欲求（*ātmanaḥ icchāyām*）を示すことが規定されているので，他人の欲求を表す場合には，名詞語幹の後に sa^{N} が起こり得ると主張する。この反論に対しては，そもそも *putra-* などの実体詞は完成した姿を表示し，行為者をもたないので，欲求行為の主体と同じ主体をもたないと答える。

2.1.1.3. tum_u^{N} や *-ana-*（$^{L}yu^{T}$）等の *kṛt*-Suffix 語幹への適用を禁止する目的（§ 13－16）

しかし，Inf.（tum_u^{N}）は，行為を表す *kṛt*-Suffix 語幹名詞として扱われるので，行為者の存在を前提とする。従って，*dhātoḥ* の文言がなければ，動詞語基ではなく tum_u^{N} の後に sa^{N} が導入されることになるので，この文言が必要であると反論者は言う。この反論に対し，*iṣ*「欲する」などの動詞と共に用いられることが，tum_u^{N} 導入条件となるので，*iṣ* などの動詞を排除してまえば，tum_u^{N} が導入されなくなると答える。しかし *-ana-*（$^{L}yu^{T}$）によって作られる行為名詞は Inf. と同様行為者を持つので，*iṣ* などの欲求を表示する動詞語基を伴わなくても sa^{N} が導入され得るという反論が起こる。これに対して，Inf.（tum_u^{N}）の行為者は明示されなくても，*iṣ* などの行為者と同じであるが，*-ana-*（$^{L}yu^{T}$）の場合は *iṣ* と同じ行為者を持つかどうか決定できないと答える。sa^{N} は，行為者の共通性が理解される場合に，つまり Inf. + *iṣ* という分析表現と同じ意味を表す場合に動詞語基の後に導入される。それ故，*dhātoḥ*「動詞語基の後に」という文言がなくても，動詞語基の後に sa^{N} が導入される。

2.1.2. Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 訳

Pāṇ. III 1,7［*san* 5, *praraḥ* 2, *pratyayaḥ* 1］

dhātoḥ karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyāṃ vā

動詞語基（*dhātu-*）［が示す行為］が［欲求の］対象であり，［欲求行為と］同じ行為主体を持つ場合，その後に，接辞 sa^{N} は欲求の意味で任意に用いられる。

§1 【問い：*dhātoḥ* の文言の目的】

Bhāṣya

dhātor iti kimartham /

「*dhātoḥ*」と［言われているのは］何のためか。

Prādīpa

dhātoḥ karmaṇaḥ */ dhātor arthadvārake karmatvasamānakartṛkatve / te cecchāyāḥ pratyayārthatve 'pi sannidhānāt tadapekṣe eva gṛhyete / evaṃ ca prakṛtyarthopasarjanaḥ pratyayārtho bhavati, anyathā prakṛtipratyayārthayor asaṃbhandaḥ syāt /*

vārtikāvatāraṇāya praśnaṃ karoti — ***dhātor iti kimartham iti*** */ ayaṃ bhāvaḥ — dhātur eva kriyāvācī, upasargas tu viśeṣakaḥ / tataś cārthadvārake karmatvasamānakartṛkatve dhator eva saṃbhavata iti /*

［当該規則の］*dhātoḥ karmaṇaḥ* 以下について。動詞語基（*dhātu-*）［が示す行為］が行為の対象（*karman-*）であること，及び［欲求行為と］同じ行為主体を持つものであることは意味を通じて理解される。そして欲求は接辞の意味であるけれども，その両者（*karman-* と *samānakartṛka-*）は［*icchāyām* と］隣接しているので[9]，まさしくそれ（*icchā*「欲求」の意味）を期待するものと捉えられる。そのような場合，接辞の意味は語基の意味を従属要素とするものとなる，さもなければ，語基と接辞の意味が不結合（ばらばら）になりかねない。

Vārt. を導入するために「*dhātoḥ*［と言われているの］は何のためか」という問いを

[9] Uddyota：*nanv icchāyām iti saptamyantatvāt karmaṇa ityādinānvayayogyam itīcchārupe 'rthe dhātvantarārthakarmaṇas tena samānakartṛkād api san syād ata āha — te ceti / saṃnidhānād vibhaktipariṇāmena tayor api sā viśeṣaṇam iti bhāvaḥ*「"*icchāyām* という第 7 格（Lok.）語尾で終わる語であるから，［Abl. 形の］*karmaṇaḥ* 以下には［意味と表現との間の］連続性（*anvaya-*）は適合しないではないか"［という反論がある］。［それに対して言われる。］欲求の姿をした意味で（つまり欲求の意味を帯びて），別の動詞語基の意味を持つ行為対象となり，またそれ（欲求行為）と行為主体を同じくする［動詞語基］の後でも，sa^{N} が生じ得る。だから "*te ca...*" と言っている。隣接しているから，格語尾の改変（*vibhaktipariṇāma-*）によって，それ（*icchā*）はこの二つの語に対しても限定要素となる；以上が謂う心である」。ここで問題となっているのは sa^{N} が示す欲求と欲求の対象となる，動詞語基が示す行為との結びつきをいかにして保証するかということである。sa^{N} は接辞の意味として欲求以外に行為の対象となることと行為者が同じであることを示し，他方，sa^{N} が導入される動詞語基は欲求の意味を帯びる。その場合，格語尾の改変によって *icchāyām* を *icchāyāḥ* として *dhātoḥ* に一致させることによって，動詞語基は欲求の意味を帯びることになる。

立てる。これが謂う心である：動詞語基だけが行為を表示するものであり，他方，動詞前接辞は［行為を］区別するものである。そして，それ故，意味を通じて理解される，行為の対象であることと［*iṣ* によって示される行為と］同じ行為主体を持つものであることは動詞語基だけから生じる。

解説

本来，表現レベル（*śabda-*）に属する動詞語基（*dhātu-*）が，意味レベル（*artha-*）に属する行為の対象（*karman-*）や共通の行為主体を持つもの（*samānakartṛka-*）となることはないが，ここでは意味を通じて意味レベルに属するものとして理解される[10]。例えば，*kartum icchati*「彼は為すことを欲する」という分析表現（*vākya-*）において，動詞語基 *iṣ* が示す行為は欲求（*icchā-*）であり，*kartum* が表示する「為す」という行為は *iṣ*「欲する」という動詞語基によって示される行為（*kriyā-*）の対象（*karman-*）である。他方，*cikīrṣati* という統合表現（*vṛtti-*）においては欲求は接辞（*pratyaya-*）*sa*^{N} の意味となり，「為す」という行為（*kriyā-*）は動詞語基の意味となる。本来，動詞語基が主要素（*pradhāna*）であり，接辞は従属要素（*upasarjana-*）であるが，ここでは，*sa*^{N} の意味は分析表現において動詞語基 *iṣ* が示す意味に対応するので主要素である[11]。他方，動詞語基 *kṛ* が示す意味は分析表現においては行為の対象（*karman-*）という行為関与要素（*kāraka-*）なので，従属要素となる。

§2 【答え：動詞前接辞を伴う語への導入を禁止する目的】

Bhāṣya

prakartum aicchat prācikīrṣat / sopasargād utpattir mā bhūd iti /

prakartum aicchat「作り始めることを欲した」［という意味で］*prācikīrṣat*［が用いられるために］。動詞前接辞を伴う［動詞語基］の後では，［*sa*^{N} が］生じてはならないとい

---

[10] Uddyota : *śabdasya dhātoḥ karmatvasamānakartṛkatvāsaṃbhavāt sūtre sāmānādhikaraṇyānupapattiḥ tābhyāṃ vārtikoktadhātugrahaṇaprtyākhānānupapattiś cety ata āha — arthadvāreti*「語形である *dhātu-* が行為の対象となることや共通の行為者をもつことは起こり得ないので，当該規則において両者（*karmatva-* と *samānakartṛtva-*）との同一対象指示性は生起しない。また Vārt. で述べられている，*dhātu-* の文言を否定することも生起しないというこうした［理由］から，*arthadvāra-* と言っている。」

[11] Pāṇ. I 2,56 によれば，意味の主従関係は別の尺度から決定されるべきものなので，これを教えることはできない。Kāśikā によれば，パーニニに先行する文法学者（*pūrvācārya-*）たちは主要素と従属要素は共に主要素の意味を表し，語基と接辞は共同して意味を表す（Cardona 1997 : 604, §877）。

う［目的がある］。

Pradīpa

sopasargād iti */ saṅghātena viśiṣṭā kriyā pratipādyata iti tata eva sanutpattiprasaṅgaḥ / tataś ca saṅghātāder eva dvirvacanādiprasaṅga iti bhāvaḥ /*

sopasargād について。「限定された行為は［動詞前接辞と動詞語基からなる］複合体によって理解される；従って，他ならぬそれ（複合体）の後に *sa*^{N} が生じるという事態が［起こる］。そしてそれ故，他ならぬ複合体の始め［の要素］の後に重複（*dvirvacana*）などの事態が［起こる］（i.e. *prakṛ-sa-* > * *prakṛ-prakṛ-sa-*）。以上が謂う心である。

§ 3 【*dhātoḥ* の文言は不要とする立場】

Vārt. 1

karmagrahaṇāt sanvidhau dhātugrahaṇānarthakyam // 1 //

karman-［など］の文言があるので，*sa*^{N} の導入規定においては，*dhātu-* の文言は意味がない。

Bhāṣya

karmagrahaṇāt sanvidhau dhātugrahaṇam anarthakam / karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyāṃ vā saṃ bhavatīty eva dhātor utpattir bhaviṣyati //

karman-［など］の文言があるので，*sa*^{N} の導入規定においては，*dhātu-* の文言は意味がない。*karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyāṃ vā sam bhavati* と［述べる］だけで動詞語基の後において［*sa*^{N} が］生じるであろう。

Pradīpa

karmagrahaṇād iti */ etad upalakṣaṇam tena 'samānakartṛkagrahaṇād' ity api boddhavyam /*

karmagrahaṇād について。これは提喩（*upalakṣaṇa*）であり，それによって「*samānakartṛkagrahaṇād*」ということも理解されるべきである。

§ 4 【*dhātoḥ* の文言は必要とする立場】

Bhāṣya

sopasargaṃ vai karma tata utpattiḥ prāpnoti[12]/

行為の対象（*karman*-）は動詞前接辞をともなう［動詞語基が表示する行為であり］[13]，それ（動詞前接辞をともなう語）の後に，［*sa*^{N} が］生じることが結果する。

Pradīpa

sopasargam iti */ saṅghātasya kriyāviśeṣābhidhāyitvād iti bhāvaḥ /*

sopasargam について。「［前接辞と動詞語基からなる］複合体は特定の行為を表示するものであるから；以上が謂う心である。

§ 5【*dhātoḥ* の文言は不要とする立場からの反論 1】

Vārt.

sopasargaṃ karmeti cet karmaviśeṣakatvād upasargasyānupasargam karma // 2 //

行為の対象は動詞前接辞を伴う［動詞語基が示す行為である］というならば，動詞前接辞は行為の対象［となる行為］を限定するものであるから，行為の対象は動詞前接辞を伴わない［動詞語基が表示する行為である］。

Bhāṣya

sopasargaṃ karmeti cet karmaviśeṣaka upasargaḥ / anupasargam eva hi karma //

行為の対象は動詞前接辞を伴う［動詞語基が表示する行為である］というならば，動詞前接辞は行為の対象［となる行為］を限定するものである。行為の対象は動詞前接辞を伴わない［動詞語基が表示する行為のみである］[14]。

---

[12] Benares-Edition は *sopasargaṃ vai ...prāpnoti* の前に *sopasargaṃ vai karma* を Vārt. として挿入している（Kielhorn-Abhyankhar, vol. II, p. 12, line 5）。Nirṇayasāgar 本もこれに従う。だが，Raghunātha が p. 23, fn.7 において指摘するように，後の Bhāṣya（vol. III, p. 13, line 18ff.）において Vārt. 1-3 が再び引用されるが，その中には *sopasargasya vai karma* という表現が見いだされないことから，Bhāṣya 作者に帰せられるものと判断される。

[13] Adj. *sopasarga*-「動詞前接辞を伴う」は当然 *dhātu*-「動詞語基」を形容するので，通常は男性で現れるが，ここでは *karman*- n. に対する述語なので中性となっていると理解した（§2 の Bhāṣya に見られる *sopasargād* は「動詞前接辞を伴う［動詞語基］」という男性名詞）。あるいは別の解釈として，Bhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 では一貫して「動詞前接辞を伴う語（*pada*- n.）」とも考えられる。

[14] Cf. Vārt. 3 ad Pāṇ. I 3,1（vol. I, p. 255, line 22f.）*kriyāvacana upasargapratyayapratiṣedhaḥ*「行為を表示す

avaśyaṃ caitad evaṃ vijñeyam anupasargaṃ karmeti[15] /
そしてこの場合，必然的に，次のように判断されるべきである：「行為の対象は動詞前接辞を伴わない［動詞語基が表示する行為である］」と。

Pradīpa

karmaviśeṣaka iti */ ata eva vacanāt ṣaṣṭhīsamāsapratiṣedho 'nityaḥ / ayam arthaḥ − dhātur eva kriyāvācīti tadarthasyaiva karmatvam / na tūpasargārthasyāpi / yathoktam − kaṭa eva karma tatsāmādhikaraṇyāt tu bhīṣmādibhyo dvitīyā bhaviṣyatīti / athāpi viśeṣaṇasya pṛthak karmatvam / yathoktam − kaṭo 'pi karma bhīṣmādayo 'pīti / tathāpi karmasamudāyasyākarmatvāt samudāyād utpattir na bhaviṣyati //*
karmaviśeṣakaḥ について。この言明があるからこそ，第 6 格（Gen.）［で終わる語から形成される］複合語（genetive tatpuruṣa）の禁止は必須ではない[16]。このような意味である：「動詞語基だけが行為を表示するものであり，従って，それ（動詞語基）の意味だけが行為の対象である。だが動詞前接辞の意味までもが行為の対象となるのではない[17]。［以下に］言われるように：*kaṭa-*「敷物」だけが行為の対象であり，他方それ（*kaṭa-*）との同一対象性を指示するから，*bhīṣma-*「恐ろしい（巨大な）」などの後には第 2 格（Akk.）が用いられるであろう。さらに限定要素は別個に行為の対象となる。*kaṭa-* も *bhīṣma-* などの語も［行為の対象を表示する］と言われる。そうであっても，行為の対象［を形成する］集合は行為の対象ではないので，［前接辞と動詞語基の］集合の後に［*sa*[N]

るもの［が動詞語基と呼ばれる］ならば，動詞前接辞や接辞［を伴うもの］に対する［*dhātu-* という用語の使用］禁止が［述べられるべきである］」。この問題については小川（1995：26ff.）を見よ。

15 Benares-Edition には *anupasargaṃ karmeti* は見られない（vol. II. p. 12, line 8）。

16 Pāṇ. II 2,16 *kartari ca*［*trajakābhyām* 15, *na* 10, *ṣaṣṭhī* 8］「第 6 格（Gen.）語尾で終わる語は，行為者［を表示する］場合，*tṛ*[C] と *aka*［で終わる語］とは複合語を形成しない」。Siddh.Kaum. 709 は Kāśikā と異なる解釈を示している。Pāṇ. II 2,15 *tṛjakābhyāṃ kartari ca* において *kartari* は Pāṇ. II 2,8 から続く *ṣaṣṭhī* に結びつくのではなく，当該規則の *tṛjakābhyām* に結びつくと解している。詳細については Sharma（1995：81f.）を参照。いずれにせよ，ここではパタンジャリが *karmaviśeṣaka-* という複合語を実際に使用していることから，*karmaṇaḥ viśeṣakaḥ* から *karmaviśeṣaka-* を作ることは必ずしも禁止されていない。ちなみに *-tár-* 語幹名詞（hysteroton）が動詞的格支配関係を構成する複合語（verbales Rektionskompositum）を作る例が僅かながらブラーフマナ文献に見られる：*rājakartāraḥ*「王に据える者たち」AB VII 17,5, *karmakartā*「作品を作る者，職人」JB II 226（Tichy 1995：80f.）。

17 Uddyota：*saṅghātena viśiṣṭakriyāvagatāv api viśeṣyasyaiva karmatvaṃ*, *pradhānyād iti bhāvaḥ / tatra dṛṣṭāntam āha − yathoktam iti*「複合体によって限定された行為が理解される際にも，［前接辞によって］限定されるもの（動詞語基）は，主要なものであるから，行為の対象である。以上が謂う心である。」

が］生じることはないであろう。

§ 6【*dhātoḥ* の文言を不要とする立場からの反論 2】

Vārt. 3

sopasargasya hi karmatve dhātvadhikāre 'pi sano 'vidhānam akarmatvāt // 3 //

動詞前接辞を伴う［動詞語基］が行為の対象であるならば，［Pāṇ. III 1,7 が］*dhātu-*［の文言（Pāṇ. III 1,91）の］の支配下にあるとしても，*sa*^{N}［の使用は］規定されない。［複合体の一部でしかない動詞語基は］行為の対象とならないので。

Bhāṣya

yo hi manyate sopasargaṃ karmeti kriyamāṇe 'pi tasya dhātugrahaṇe sano 'vidhiḥ syāt / kiṃ kāraṇam / akarmatvāt //

「行為の対象は動詞前接辞を伴う［動詞語基が表示する行為である］」と考える人，そうした人にとっては，*dhātu-* の文言が設けられていても，［行為の対象を示す語の後に］*sa*^{N} の［導入が］規定され得ない。何故か。［複合体の一部でしかない動詞語基は］行為の対象ではないから。

Pradīpa

sopasargasya hīti / *yadi saṅghātasyārthadvārakaṃ karmatvaṃ syāt tadā avayavasyākarmatvāt tataḥ sanpratyayo na syāt / 'karmaṇa' ity eṣā hi pañcamī / ṣaṣṭhyāṃ tu satyāṃ karmaṇo 'vayavād dhātoḥ sann ity āśrīyamāṇe 'nupasargān na syāt /*

tasmāt—

sopasargasya hi 以下について。もし［動詞前接辞と動詞語基からなる］複合体（*saṅghāta-*）［が表示する行為］が行為対象であるということが，意味を通じて理解され得るならば，その時は，部分（つまり動詞語基が示す行為）は行為の対象（*karman-*）［全体］ではないので，それ（複合体の部分）の後に *sa*^{N} は生じ得ない。何故なら *karmaṇaḥ* というこの［語形］は第 5 格（Abl.）語尾で終わる語であるから。他方，第 6 格（Gen.）語尾で終わる語だとすれば，行為の対象の部分である動詞語基の後に *sa*^{N} が［用いられる］ということが認められる時，動詞前接辞を持たない［動詞語基］の後には生じることが

できない。それ故［次のように言われている］:

VP II 180[18]

aḍādīnaṃ vyavasthāyai pṛthaktvena prakalpanāt /

dhātūpasargayor dhātuḥ kriyāvācīti nirṇayaḥ //

a^{T}［の位置］などを確定するために，動詞語基と前接辞が異なるものとして構想されるので，動詞語基が行為を言い表すと決定している。

解説

もし動詞前接辞を伴う語が行為の対象（*karman-*）であると考えるならば，行為の対象は動詞前接辞と動詞語基からなることになる。しかし，そうだとすると，動詞語基は行為の対象の一部であって，行為の対象全体ではないので，*karmaṇaḥ*（Abl.）と *dhātoḥ*（Abl.）は同一の対象を指示することにならない。従って，動詞前接辞を伴う動詞語基の後に sa^{N} を導入することができない。他方 *karmaṇaḥ* を *avayavaṣaṣṭhī*「部分と全体の関係を表す Gen.」と見なすならば，行為の対象の一部をなす動詞語基に sa^{N} が適用可能となるが, 今度は逆に動詞前接辞と動詞語基の複合体全体に適用することができない。

§ 7 【名詞への導入を禁止する目的】

Bhāṣya

idaṃ tarhi prayojanaṃ subantād utpattir mā bhūt /

それならこれが目的である：格語尾で終わる語の後には［sa^{N} が］生じてはならない。

Pradīpa

subantād *iti / vikalpitatvāt sanaḥ pakṣe sāvakāśāḥ kyajādaya iti bhāvaḥ / prātipādikād iti tu noktam / karmaṇa iti vacanāt karmatve ca sati subantatāyā avaśyaṃbhāvāt /*

subantād について。sa^{N}［の導入は］任意なので，もう片方の選択肢において（*pakṣe*），${}^{K}ya^{C}$ などは［適用の］余地を伴うというのが謂う心である。たが「名詞語幹の後に」と

[18] Cf. VP II 180（Rau 2002：81）：*aḍādīnāṃ vyavasthārthaṃ pṛthaktvena prakalpanam / dhātūpasargayoḥ śāstre dhātur eva tādṛśaḥ*「a^{T}［の位置］などを確定するために，文法学では動詞語基と動詞前接辞が異なるものとして構想される。だが，［現実には］動詞語基がそのような（動詞前接辞と動詞語基からなる）もの［と見なされる］。」

［規則中に］言われていない。「行為の対象［を示す語］の後に」という言明があるので，行為の対象であれば，格語尾で終わる語であることは必然的に生じるから。

§ 8【*dhātoḥ* の文言を不要とする立場からの反論 1】

Vārt.

subantāc cāprasaṅgaḥ kyajādīnām apavādatvāt // 4 //

そして格語尾で終わる語の後に，［*sa*^{N} の生起は］想定されない，^{K}*ya*^{C} など［を定める規則（Pāṇ. III 1,8ff.）[19]］は［Pāṇ. III 1,7 の］例外規定であるから。

Bhāṣya

subantāc ca sano 'prasaṅgaḥ / kiṃ kāraṇam / kyajādīnām apavādāt / subantāt kyajādayo vidhīyante te 'pavādatvād bādhakā bhaviṣyanti /

格語尾で終わる語の後に，［*sa*^{N} の導入は］想定されない。何故か。^{K}*ya*^{C} などを定める［諸規則（Pāṇ. III 1,8ff.）］は例外規定であるから。格語尾で終わる語の後では ^{K}*ya*^{C} など［の接辞の導入］が規定される。これらは，例外規定であるがゆえに，［Pāṇ. III 1,7 を］斥けるために[20] 起こるであろう。

Pradīpa

kyajādīnām iti */ karmamātrāt sanvidhiḥ / karmaviśeṣāt subantāt kyajādaya iti bhāvaḥ / yatra cotsargāpavādau vibhāṣā tatrāpavādena mukta utsargo na bhavati / api tu vākyam eva //*

kyajādīnām について。行為の対象一般の後に，*sa*^{N}［の導入が］規定される。［それ故］「特殊な行為対象を示す，格語尾で終わる語の後に［も *sa*^{N} が用いられる］；以上が謂う心である。一般規定と例外規定とが任意［に適用される］場合，その場合は，例外規定から離れた［領域］においては，一般規定［が定める *sa*^{N}］は用いられない。ではなくて文（分析表現）だけが用いられる。

---

[19] Pāṇ. III 1,8 *supa ātmanaḥ kyac*［*karmaṇaḥ*, *icchāyāṃ vā* 7, *paraḥ* 2, *pratyayaḥ* 1］「［欲求行為の］対象［を示す］名詞（*s*^{UP} で終わる語）の後に，自分に対する欲求の意味で任意に ^{K}*ya*^{C} が用いられる」。

[20] Pāṇ. III 3,10 によれば，*-aka-* は目的の意味にも使用される（Cf. Wackernagel / Debrunner 1954 : 145）。

解説

Pāṇ. III 1,8 により欲求を表示するために，Denom. を形成する接辞 $^{K}ya^{C}$ は任意に名詞（*subanta-*）の後に導入される。もし *dhātoḥ* という文言がなければ，sa^{N} は行為の対象を表示するものとして動詞語基の後にだけでなく，名詞語幹の後にも導入されることになり，$^{K}ya^{C}$ の適用領域をも含むことになる[21]。そして *vā*「任意」という文言に基づいて，$^{K}ya^{C}$ が導入されない場合は，sa^{N} が名詞の後に導入される可能性が出て来る。だが，ここで言われる *vā*「任意に」とは，sa^{N} と $^{K}ya^{C}$ とが任意に交代することではなく，$^{K}ya^{C}$ による統合表現（*vṛtti-*）と分析表現（*vākya-*）が任意に用いられることを意味している。従って，$^{K}ya^{C}$ が用いられない場合は，分析表現が用いられる。

§ 9 【*dhātoḥ* の文言を不要とする立場からの反論 2】

Vārt.

anabhidhānād vā // 5 //

或いは［sa^{N} が格語尾で終わる語の後に導入され得るとしても，意図する意味を］表示しない（表現として成り立たない）から。

Bhāṣya

atha vānabhidhānāt subantād utpattir na bhaviṣyati / na hi subantād utpadyamānena sanecchāyā abhidhānaṃ syāt / anabhidhānāt tata utpattir na bhaviṣyati /

或いはまた［意図する意味を］表示しないから，格語尾で終わる語の後で［sa^{N} が］生じることにはならないであろう。何故ならば，格語尾で終わる語の後では，sa^{N} が生じることによっては，欲求を表示することは有り得ない。［欲求の意味を］表示しないから，それ（名詞）の後では，［sa^{N} が］生じることが起こることにはならない。

§ 10 【反論 2 に対する反論】

Bhāṣya

iyaṃ tāvad agatikā gatir yad ucyate 'nabhidhānād iti //

---

[21] Cf. Uddyota : *kyajādīnām apy ekārthībhāve eva pravṛtteḥ sanabhāve +tadabhāvād na kyajādīnāṃ sāvakāśateti bhāvaḥ*「$^{K}ya^{C}$ などの［接辞］も，ひとまとまりの意味が生じる場合にのみ，適用されるので，sa^{N} が生じなければ，それ（ひとまとまりの意味となること）は生じないので，$^{K}ya^{C}$ などに適用の余地はない；以上が謂う心である」。

そもそも *anabhidhānāt*「［意図される意味を］表示しないから」と言われる，この行き方（*gati-*「行き方，方策」）は，［他に］行き方がない［時の］行き方（つまり最終手段）である。

Pradīpa

iyaṃ tāvad iti // lakṣaṇāśrayā lakṣyasya vyavasthā nyāyā lakṣyāśrayeṇa tu lakṣaṇavyavasthāpanaṃ gatyantarābhāvād //

iyaṃ tāvad 以下について。規則を拠り所とした，規則の対象（語形）の確定が［本来］理に適っている。だが，他の行き方（方策）がないので，規則の対象（語形）を拠り所とすることによって，規則［の意味］を確定する。

§ 11【反論 1 に対する反論】

Bhāṣya

yad apy ucyate "subantāc cāprasaṅgaḥ kyajādīnām apavādatvād" iti. bhavet kasmāc cid aprasaṅgaḥ syād ātmecchāyām / parecchāyāṃ tu prāpnoti / rājñaḥ putram icchatīti //

「格語尾で終わる語の後では，［*sa*^{N} が起こるという事態は］想定されない，^{K}*ya*^{C} などは例外規定であるから」とも言われる。たしかに（*bhavet*），自分［に関係する］欲求の意味を示す時は［^{K}*ya*^{C} が用いられるので］，如何なる［格語尾で終わる語］の後でも，［*sa*^{N} が起こるという事態は］想定されない。だが他人［に関係する］欲求の意味では，［*sa*^{N} の生起が］結果する。［例えば］「彼は王に息子を望む」と［いう文において *putra-* の後に *sa*^{N} が用いられることになる］。

§ 12 【*dhātoḥ* の文言を不要とする立場】

Bhāṣya

evaṃ tarhīdam iha vyapadeśyaṃ sad ācāryo na vyapadiśati / kim / "samānakartṛkād" ity ucyate na ca subantasya samānaḥ kartāsti //

そうだとすると，それなら，ここで，これが指摘されるべきであるが[22]，先生（Vārtika の作者）は指摘していない。何か。［即ち］*samānakartṛkāt*「同じ行為主体を持つ語の後

[22] 或いはカイヤタのように Part. Präs. *sat* を実体詞化したものと解釈し，「この指摘されるべき利点（*sat*）を」とも訳すことができる。

に」と［Sūtra において］言われるが，だが格語尾で終わる語には［そもそも］同じ行為主体などない。

Pradīpa

vyapadeśyaṃ sad iti */ sac chobhanaṃ yad vyapadeśārhaṃ tan na vyapadiśati //*

na ca subantasyeti */ putrādeḥ sattvabhūtārthābhidhāyitvāt sādhyasyaiva sādhanasaṃbandhayogyatvād iti bhāvaḥ //*

kaṭaṃ karotītyādāv api subantena siddharūpo ’rtho ’bhidhīyate, śabdāntarasannidhānāt tu sādhyatā pratīyate / yathoktaṃ hariṇā —

vyapadeśyaṃ sad について。*sat* とは *śobhana-*「優れた点（利点）」である。つまり指摘する価値があること，それが示されていない。

na ca subantasya 以下について。*putra-* などは，実体である意味を表示するから，［行為主体を持たない］。実現対象（= *kriyā-*「行為」）だけが［行為の］実現主体と結びつくのに適しているから；以上が謂う心である。

kaṭaṃ karoti など［の文］においても，格語尾で終わる語によって，［行為が］実現した相を持つ意味が表示されるが，だが別の語形が同じ場所にあるから，実現対象（行為）［の存在］が明らかになる。バルトリハリによって言われているように：

> VP III 7,75
> *nirvartyo vā vikāryo vā prāpyo vā sādhanāśrayaḥ /*
> *kriyāṇām eva sādhyatvāt siddharūpo ’bhidhīyate // iti*
> ［行為の］実現主体の拠り所（つまり *karman-*「行為の対象」）は，完成対象であれ変容対象であれ，到達対象であれ，諸々の行為だけが実現の対象となるので，［行為が］実現した姿が表示される[23]。

§ 13　【*dhātoḥ* の文言が必要だとする立場からの反論】

Bhāṣya

evam api bhavet. kasmāc cid aprasaṅgaḥ syād yasya kartā nāsti / iha tu prāpnoti āsitum

---

[23] バルトリハリの *karman-* の分類については，小川（2008：25ff.）を見よ。

icchati śayitum icchatīti /

そうかもしれない。その語に行為者が存在しなければ，いかなる語の後にも［*sa*^{N} が生じるという事態は］起こり得ない。だが，ここ（以下の文）では，［*tum*$_{u}^{N}$ は行為者を持っているので，*tum*$_{u}^{N}$ で終わる語の後に *sa*^{N} の生起が］結果する：*āsitum icchati*, *śayitum icchati*。

Pradīpa

āsitum icchatīti / tumunantasya sādhyarūpābhidhāyitvād asti kartrā yoga iti bhāvaḥ // kyaci māntāvyayapratiṣedha iti kyaj atra pratiṣiddhaḥ //

āsitum icchati 以下について。*tum*$_{u}^{N}$ で終わる語は実現対象（行為）の形を表示しているから，行為者と結びつく，というのが謂う心である。^{K}*ya*^{C}［の導入］の際には，*m* でおわる不変化語（*tum*$_{u}^{N}$ で終わる語）[24]［の使用］が禁止される。従って，^{K}*ya*^{C} はこの場合（*tum*$_{u}^{N}$ と共に用いられる場合）禁止される。

§ 14 【*dhātoḥ* の文言を不要とする立場】

Bhāṣya

icchāyām arthe san vidhīyata icchārtheṣu ca tumun / tatra tumunoktatvāt tasyārthasya san na bhaviṣyati //

欲求の意味［が表示される］場合，*sa*^{N}［の導入］が規定され，他方，欲求の意味［を表示する動詞語基が upapada である］場合，*tum*$_{u}^{N}$［の導入が規定される］[25]。その場合，それ（欲求）の意味は *tum*$_{u}^{N}$［の導入根拠である欲求を意味する動詞語基］によって表示されているから，*sa*^{N} は生じないであろう。

Pradīpa

tumunoktatvād *iti / tumunnimittenecchatīty anenety arthaḥ / na cecchatīty asya prayogaṃ bādhitvā san bhavatīti yujyate vaktum / upapadanimittatvāt tumunas tadabhāve abhāvaprasaṅgāt //*

---

[24] Pāṇ. I 1,39 *kṛn mejantaḥ*［*avyayam* 37］「*m* と *e*, *o*, *ai*, *au*（*e*^{C}）で終わる *kṛt*-Suffix［によって形成される語形］は *avyaya-* と呼ばれる」。

[25] Pāṇ. III 3,158 *samānakartṛkeṣu tumun*［*icchārhteṣu* 157, *dhātau* 155, *upapadam* 1,92］「欲求の意味を表示する動詞語基（V_1）が upapada であり，［動詞語基（V_2）と］同じ行為者を持つ時，動詞語基（V_2）の後に *tum*$_{u}^{N}$ が生じる」。

tumnoktatvād 以下について。tum_u^N の［導入］根拠である *icchati*「欲する」というこれ（*upapada-*）によって［欲求の意味が表示されるから］という意味である。そして *icchati*「欲する」というこれ（*upapada-*）の使用を斥けて，sa^N が生じるということは適切ではない。tum_u^N は upapada（= *icchati*）を原因［として生じる］から，それ（*upapada-*）が生じなければ，［tum_u^N が］生じないという事態が起こるから。

§ 15 【*dhātoḥ* の文言を必要とする立場】

evam apīha prāpnoti āsanam icchati śayanam icchatīti /

そうだとしても，ここ（以下の文）においては，［sa^N の導入が］結果する：*āsanam icchati, śayanam icchati*.

Pradīpa

āsanam icchati */ lyuḍ bhāvamātre vidhīyate, na tv icchārtheṣūpapadeṣv iti bhāvaḥ / dhātuvācyakriyāpekṣaṃ ca samānakartṛkatvam asti //*

āsanam icchati について。*-ana-*（$^L yu^T$）は行為一般［が表示される］場合，［導入が］規定されるが，だが欲求の意味を表示する動詞語基が upapada である時は［導入が規定され］ない。以上が謂う心である。そして［$^L yu^T$ も］動詞語基によって言われる行為を期待し，共通の行為者を持っている。

§ 16 【*dhātoḥ* の文言を不要とする立場】

Bhāṣya

iha yo viśeṣa upādhir vopādīyate dyotye tasmiṃs tena bhavitavyam / yaś cārtho gamyate āsitum icchati śayitum icchatīti svayaṃ tāṃ kriyāṃ kartum icchatīti nāsāv iha gamyate āsanam icchati śayanam icchatīti / anyasyāpy āsanam icchatīty eṣo 'py artho gamyate / avaśyaṃ caitad evaṃ vijñeyam / yo hi manyate 'dyotye tasmiṃs tena bhavitavyam iti kriyamāṇe 'pi tasya dhātugrahaṇa iha prasajyeta : saṃgatam icchati devadatto yajñadatteneti //

ここ（我々の見解）では，特別性（=*samānakartṛka*），又は［sa^N の導入条件を］限定するものとして言及されるもの，それが明らかにされるべき時，それ（sa^N）が用いられるべきである。他方，*āsitum icchati*, *śayitum icchati* において理解される意味，即ち，彼自身がその行為を行うことを欲する，という，そのことは，ここ（以下の例文）においては

理解されない：*āsanam icchati śayanam icchati*。「自分以外の者も座ることを欲する」というこのような意味とも理解される。そしてここでは必然的にそのように判断されるべきである。何故ならば「[特別性や限定要素が] 明らかにされ得ない時，それ（*sa*^{N}）が用いられるべきである」と考える人，そうした人にとっては，*dhātu-* の文言が設けられていても，ここ（以下の例）において，[*sa*^{N} が] 起こりかねないから：*saṃgatam icchati devadatto yajñadatteneti*「デーヴァダッタがヤジュニャダッタと出会うことを欲する」。

Pradīpa

iha yo viśeṣa *iti / samānaśabdas tadantavācyo 'rtha upādhir anyas tu viśeṣa iti bhāvaḥ // kva cit tv abhedena vyavahāraḥ /*

āsitum icchatī*ti / vṛttisamānārthena vākyena bhavitavyam / āsisiṣata ity asya cāsitum icchatīti samānārthaṃ bhavatīti bhavaty āseḥ sanpratyayaḥ / āsanam icchatīty atra tu kim ātmana āsanam icchati atha parasyeti saṃdehāt samānakartṛkatvāpratipattir ity āsanaśabdāt san pratyayo na bhaviṣyati / na hy ataḥ san utpadyamānaḥ samānakartṛkatvalakṣaṇaṃ viśeṣam antarbhāvayituṃ śaknotīti bhāvaḥ //*

saṃgatam icchatī*ti / kevalasya dhātoḥ prayogābhāvāt ktapratyayopādānaṃ, dhātor eva tu sanprasaṅga ity ucyate / atra ca kim ātmakartṛkaṃ saṃgatam icchati atha parakartṛkam iti saṃdehād yadā samānakartṛkatvaṃ nāvadhāryate tadā na bhāvyam / yadā tu samānakartṛkatvaṃ pratipipādayiṣitaṃ tadā bhavitavyam eva sanā saṃjigaṃsate vatso mātreti //*

iha yo viśeṣaḥ 以下について。[統合表現と] 同じ [意味を持つ] 表現としてそれ（*sa*^{N}）で終わる語によって表示される意味が *upādhi-*「限定要素」であるのに対し，他方，特別性は別のものである；以上が謂う心である。だが，ある場合には，区別なくして取り扱われる。

āsitum icchati について。統合表現と等しい意味の文が用いられるべきである：*āsisiṣate* というこれ（統合表現）には，*āsitum icchati* と等しい意味があるので，*ās* の後に *sa*^{N} の接辞が [生じる][26]。*āsanam icchati* という，この場合，自分が座ることを欲するのか，

[26] Uddyota : *bhāṣye* — ***dyotye tasminn*** *iti / vṛttyā śabdajanyabodhaviṣaye ity arthaḥ //* ***vṛttī****ti tumunante vigrahavākye samānakartṛkatve tumuno vidhānāt samānakartṛkatvapratītes tu tadyuktam*

それとも，「他人が［座ることを欲するのか］」という疑念があるので，共通の行為者を持つという性質は理解されない，従って，*āsana-* の語の後に *sa*^{N} の接辞は生じないであろう。何故なら，これの後に *sa*^{N} が起こると，共通の行為者であることを示す特徴という個別性を内に有することができないから[27]；以上が謂う心である。

saṃgatam icchati 以下について。動詞語基単独での使用は起こらないから，^{K}*ta* の接辞が言及されているが，だが［本来は］動詞語基の後にだけ *sa*^{N} が想定される，ということが言われている。そしてこの場合，自分を行為者とする出会い（*saṃgata-*）を欲するのか，それとも他人を行為者とする［出会いを欲するのか］という疑念があるから，行為者の共通性が確定されない時，その時は［*sa*^{N} は］生じるべきではない。だが行為者が共通であることが理解されようとする時，その時は *sa*^{N} が生じ得る：*saṃjigaṃsate vatso mātrā*「仔牛は母と出会おうとする」。

解説

Desid. による統合表現は意味の上でパラレルな分析表現（*tum*$_{u}^{N}$ + *iṣ*）をもっており，その分析表現が表示する意味がそのまま *sa*^{N} を導入をするための要件となる。これを本来 *upādhi-* と呼ぶ。一方，*viśeṣa-* とは分析表現における特別性であり，ここでは，*tum*$_{u}^{N}$ が表示する行為の主体が *iṣ* の行為主体と同じである（*samānakartṛkatva-*）という ^{L}*yu*^{T} とは異なる性質を指している。これら二つの用語は，Pradīpa において指摘されているように，現実には区別されずに使用される。

---

samānakartṛkatvaviṣayasano vigrahavākyam, bhāvaviṣayalyuḍante tu tadaniścayān na tat sano vigrahavākyam iti nāsanaśabdāt sanutpattir iti bhāvaḥ //「Bhāṣya における *dyotye tasminn* 以下について。「［*tasmin* 即ち］語から生じる理解の領域が統合形によって［明らかにされる時（*dyotye*）］」という意味である。*vṛtti-* について。分析文において *tum*$_{u}^{N}$ で終わる語が行為者を同じくする時，*tum*$_{u}^{N}$ が導入されるので，他方でまた，［*tum*$_{u}^{N}$ は］同じ行為者を持つものであることが明らかなので，行為者を同じくするものであることを［意味］領域とする *sa*^{N} にはそれに一致した分析文があるの対し，他方，行為を［意味］領域とする ^{L}*yu*^{T} で終わる語の場合，それ（行為者が共通であること）が決定されないので，*sa*^{N} にはそうした分析文はない，従って，*sa*^{N} は生起しない；以上が謂う心である」。

27 Uddyota : *na hy ata iti / vigrahe tadapratīteḥ / na hy āsanaśabdagarbhaṃ samānakartṛkatvapratītiyogyaṃ vigrahavākyam astīti tadabhāvāt tataḥ sano 'nutpattir evānumīyata iti bhāvaḥ //*「*na hy ataḥ* 以下について。分析文において，それ（行為者の共通性）が明らかでないから。*āsana-* の語に内包される分析文は，行為者を同じくすることを明確にするのに適していないから。したがって，それ（行為者の共通性）がないので，それ（*āsana-*）の後に *sa*^{N} が生じないことが推測される；以上が謂う心である」。

引　用　文　献

CARDONA, George

1997 *Pāṇini, His Work and Traditions*. volume 1. Second revised and enlarged edition. Delhi

DESHPANDE, Madhav Murlidhar

1980 *Evolution of syntactic theory in Sanskrit grammar : syntax of the Sanskrit infinitive -tumUN*. Ann Arbor.

HEENEN, François

2006 *Le désidératif en védique*. Amsterdam.

KIELHORN, Franz / ABHYANKAR, Kashinath Vasudev

1962-1972 *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya of Patañjali*. edited by Franz Kielhorn. Third edition revised and furnished with additional readings, references, and select critical notes by K.V. Abhyankar. 3 vols. Poona.

NARASIMHA, M.S.

1979 *Mahābhāṣyapradīpavyākhyānāni VI. Commentaires sur le Mahābhāṣya de Patañjali et le Pradīpa de Kaiyaṭa. Adhāya 3, Pāda 1- 4*. Pondichéry : Institut Français d' Indologie.

OGAWA, Hideyo（小川英世）

1992 「Mahābhāṣya ad P1.3.1 研究（3）」『広島大学文学部紀要』第 51 号，pp. 41-61.

1995 「Mahābhāṣya ad P1.3.1 研究（6）」『広島大学文学部紀要』第 55 号，pp. 22-42.

2008 「Vākyapadīya「〈 能成者 〉詳解」（Sādhanasamuddeśa）の研究 ― VP 3.7.45-54 :〈目的〉（karman）論序 ―」『比較論理学研究』第 5 号，pp. 23-44.

RAU, Willhelm

2002 *Bhartṛharis Vākyapadīya : Versuch einer vollständigen deutschen Überstzumg nach der kritischen Edition der Mūla-Kārikās*. Hrsg. von Oskar von Hinüber. Stuttgart.

SHARMA, Rama Nath

1995 *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini, volume III : English Translation of Adhyāyas two and three with Sanskrit text, transliteration, word-boundary, Anvṛtti, Vṛtti, explanatory notes derivational history of examples and indices*. Delhi.

ŚIVDATTA, D. Kudāla / RAGHUNĀTHA, Śastrī

1937 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya with Kaiyaṭa's Pradīpa and Nāgeśa's Uddyota ; edited with foot notes collected from Chāyā, Padamañjarī and Śabdakaustubha as well as supplied by editor's own originality*. vol.3（3rd Adhyāya）.

TICHY, Eva

1995 *Die Nomina agentis auf -tar- im Vedischen*. Marburg.

WACKERNAGEL, Jacob / DEBRUNNER, Albert

1954 *Altindische Grammatik*. Bd. II-2 Die Nominalsuffixe（von A. DEBRUNNER）. Göttingen.

WEZLER, Albrecht

1975 *Bestimmung und Angabe der Funktion von Sekundär-Suffixen durch Pāṇini*. Wiesbaden.

A Study of Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 : A Theory of the Functional Meaning of the Desiderative Verb Discussed in the Pāṇinian Grammar

Junichi OZONO

The desiderative stem, which is formed by adding the suffix *-sa-* and by reduplication with *i*, expresses the subject's desire to do something. Pāṇini, in his rule III 1,7, provides that the desiderative suffix sa^{N} be used in the sense of 'desire' (*icchā-*). Furthermore, the agent of the act, which is designated as the object (*karman-*) of desire by the verbal base (*dhātu-*), is to be indentical with that of the act meaning 'desire to do something'. In the Pāṇinian Grammar, the meaning designated by the desiderative is equal to that of the analytic expression (*vākya-*) consisting of the infinitive (tum_u^{N}) and verbs that mean 'desire, wish' such as *iṣ* (present *icchati*).

Discussions in Patañjali's Mahābhāṣya on Pāṇ. III 1,7 cover a number of topics: on the purpose of the expression *dhātoḥ* in Vārt. 1-5, *samānakartṛkād* in Vārt. 6-8, *vā* in Vārt. 9-15, further comment on the semantic domain of the verbal base *iṣ* and on the re-application of sa^{N} to lexicalized desiderative stems such as *jugupsate* 'be on one's guard', *titikṣate* 'endure' and *mīmāṃsate* 'consider'.

As the first topic, the necessity of the expression *dhātoḥ* 'after a verbal base' is discussed. First, the purpose of prohibiting the application of the suffix sa^{N} to verbal bases with preverb (*sopasarga-*) is discussed. Without the word *dhātoḥ*, the suffix sa^{N} would be introduced after a verbal base with preverb. According to an objection, however, since the object of a desiring act is represented by a verbal base without preverb (*anupasarga-*), it does not follow that the suffix sa^{N} is introduced after a verbal base with preverb. Thus, the word in question is, as has been suggested elsewhere, stated for the purpose of prohibiting that the suffix sa^{N} be introduced after a noun (*subanta-*). However, the application of sa^{N} to a noun is, without the word *dhātoḥ,* blocked by the provisions of the denominative suffixes ${}^{K}ya^{C}$ (Pāṇ. III 1,8ff.), which serve as an exceptional rule to Pāṇ. III 1,7. The suffix sa^{N}, even if it does not express a desire on one's own part such as the suffix ${}^{K}ya^{C}$ does, is not to be introduced after a noun such as *putra-* 'son', which has no agent. In the case of the action noun built by the *kṛt*-suffix *-ana-* (${}^{L}yu^{T}$), one cannot decide whether the agent of an act denoted by the noun stem is identical with that of an act expressing a desire. Hence, the suffix sa^{N} cannot be introduced after a noun formed by the suffix *-ana-*. According to Pāṇ. III 3,158, the infinitive suffix tum_u^{N} is introduced if the infinitive is in a syntagmatic relation with verbal bases meaning 'desire, wish' (*icchārtheṣu dhātuṣūpapadeṣu*) as matrix verb and if both the infinitive and the matrix verb have the same agent. It is taken for granted that, to denote the same meaning as the analytic expression prescribed by Pāṇ. III 3,158, the desiderative suffix is to be introduced. It is here suggested that, without the expression *dhātoḥ*, it may be understood that the suffix sa^{N} is introduced only after a verbal base.